

愛知県美術館渾身の一大プロジェクト、「生誕 100 年 ジャクソン・ポロック展」(11月11日スタート。来年1月22日まで。その後、東京国立近代美術館に巡回します)。その関連記事として始めたこの「ポロックの足跡を訪ねて」シリーズ、今回はちょっと番外編的にアイルランドです。

まず初めに言っておきますと、ポロックはアイルランドに行ったことはありません(それどころか、生涯アメリカ国外に出たことはありませんでした)。では、アイルランドはポロックとどんな関係があるのでしょうか。



▲ ダブリン・ライターズ・ミュージアム(2006年撮影)。アイルランド文学に興味がある人は、まずここへ。



▲ ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』(1922年)の舞台となったダブリン郊外サンディコーヴの塔(2006年撮影)。
現在はジェイムズ・ジョイス博物館になっています。

ポロックの両親(アメリカ生まれ)は、二人ともスコットランド系アイルランド人の血統でした。それゆえ、ポロックにもその血が濃く流れています。だからなのでしょう、あるいはたまたまでしょうか、ポロックは熱心な読書家というわけではありませんでしたが、アイルランド文学がお気に入りだったようです。彼の書斎からは、ジェイムズ・ジョイスを筆頭に、ジョージ・バーナード・ショーの『人と超人』、ショーン・オフェイランの『アイルランド人』などを見つけることができます。ジョイスについては、『ユリシーズ』(1934年ランダムハウス版)、『スティーヴン・ヒーロー』、『ユリシーズ』(1946年モダンライブラリー版)、『フィネガンズ・ウェイク』の4冊を持っていたほどでしたが、なかでも『ユリシーズ』はポロックの制作にちょっとした関連があって興味深い存在です。

◆ ジャクソン・ポロック《五尋の底に》1947年 ニューヨーク近代美術館

画像=http://www.moma.org/collection/object.php?object_id=79070

ポロックの1947年の作品に《五尋の底に》(*Full Fathom Five*)という絵があります(「尋(ひろ)」は長さを表す単位)。そのタイトルはポロックの友人が提案したもので、本人もそれをOKしてそのように決まったのですが、シェイクスピアの『あらし』の中に、次のような有名な一節があります。

父君のいますは、たつぷり五尋 [Full fathom five],

その骨からは珊瑚ができ,

かつてのその眼は今は真珠,

朽ちる身はことごとく,

海の変容を受けて,

貴く奇しきものとなる。

ニンフが刻々鳴らす, 葬いの鐘

[奥で] デイン, ドン。

ほら, 聞こえる——デイン, ドン, ベル。

(外山滋比古他編『英語名句事典』大修館書店、1984年、213頁)

ポロックがこの一節を知っていたかどうかは分かりません。でも、それに関係した一節がジョイスの『ユリシーズ』に登場しており、少なくともそちらは知っていたはずです。

向うが五尋の淵なんでね。そなたの父はもはや五尋の水の底 [Full fathom five]。一時になればと言ったな、あの男。溺死体にて発見。ダブリン湾口の浅瀬に潮が満ちれば。小砂利の流れ溜りや、扇状に群がる魚どもや、貝殻などを押しつけて。死体は塩に白くさらされ、引波から浮びあがり。そら、ぽっかり、ぽっかり、イルカくん、頭を見せては陸地のほうへ。あそこだ。はやく鉤にかけろ。引っ張れ。たとえ水底深く沈んだにしても。つかまえたぞ。気をつけろよ。

(ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ I』丸谷オー、永川玲二、高松雄一訳、集英社文庫、2003年、131頁)



▲ ダブリン湾、サンディコーヴの塔からの眺め(2006年撮影)。



▲ ダブリン市内、リフィ川の河口(2006年撮影)。向こうはダブリン湾。

ポロックの血統とジョイスへの関心を追って、2006年にアイルランドを訪れた時、ポロックの《五尋の底に》の主調色に奇しくもよく似たダブリン湾の青緑色の水面を眺めながら、「五尋ってどれくらいの深さだろう」と思いを巡らせてみたりしました(ちなみに、五尋は10メートル弱)。



▲ ダブリンの盛り場のバー(2006年撮影)。



▲ 旧ジェイムソン蒸留所(2006年撮影)。アイリッシュ・ウイスキー「ジェイムソン」の博物館になっています。

ところで、アイルランドは文学も素晴らしいですが、酒もおいしいです(良い酒は良い文学を生むのでしょうか)。
ダブリン市内にはバーがたくさんあって、飲む所には困りません。酒好きだったポロックにはたまらない街でしょう。
この夏ポロック(8月11日が命日)のお墓参りに行く時には、ジェイムソンの小瓶でもお供えしてこようと思います。
(T.O.)